

シリーズ「グローバル・ジャスティス」
第 41 回「日本の移動とフランスの移動についてのスケッチ」
報告者：Abdelhafid Hammouche (リール第一大学教授)
(2014 年 2 月 18 日)

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第 41 回目は、「日本の移動とフランスの移動についてのスケッチ」と題されたご講演を Abdelhafid Hammouche 氏から賜った。

日本はしばしば同質的な民族によって構成された国であるとして語られがちだが、その傾向からか「移民国 *pays d'immigration*」としての自己認識が依然として弱い。しかし、事実として、日本社会には東京と大阪が顕著なように外国人居住者の数が 1980 年代以降年々増加し、最近の公式統計によれば、その数は全国で約 220 万人にも上るとい¹。もはや日本は同質的な国民国家としての自己理解を改め、移民をめぐる諸問題を諸外国の実例から学ぶ必要に迫られている。

その問題意識から、日本とフランスにおける移民の国際移動を捉えることを通じて、「移民」とは、そしてそもそも「移住する」とは何を意味するか、を考察することが本講演の主題であった。そのために、さしあたってまずはその二国に関する、移民の受入国乃至は送出国としてのブラジルとアルジェリアの観点も取り入れ、四カ国比較の視座から研究する意義について強調された。それは、「移民の受入国としてのフランス」または「移民に対して閉鎖的な国としての日本」という紋切り型の概念枠組みでは捉えきれない、移民の複合的状況を把握しなければならないからである。つまり、「移住する *migrer*」ことには、①一方の国を離れること、そして、②他方の国へ入ること、この二つのモメントが存在するのであり、その出国と入国に際しての様々な法的文化的経済的政治的差異を引きずったものであるという、「移住」の本質的特徴を捉え、彼らの置かれた状況を見なければならないのである。そこで氏は「二重の文脈化 *double contextualisation*」という概念枠組みを提起する。それは、「移住」という現象を移住先のみならず、移住元の状況を同時に押さえ、その構造的差異が生み出すダイナミズムとして捉える方法である。

そこから、上で述べたように出国と入国各々の文脈を引き継ぐ「移住」の性質を考慮して、「異人種間混交 *métissage*」の場として移民の状況に注目する。まず、戦前戦後における日・仏両国における「異人種間混交」をめぐる言説の変化を押さえたうえで、両国の移民、例えばマグレブ系移民と在日朝鮮人、在日中国人の帰属の在り方を比較する。そこから明らかになるのは、「異人種間混交」の実践としての移民を、フランスでは無文脈的で、従って「市民権 *citoyenneté*」に基づくものとして理解する傾向にあるのに対し、日本では移民を「文化的帰属」に基づくものだとする傾向にある。ここから見えてくるのが、フランスにおける移民はあくまで「市民権」の保持者として留まることも帰国することも可能であるが、日本の場合、移民を「市民権」の保持者としてみるのではなく、「出身地 *origine*」の観点から捉えており、同権者として遇していないことである。この点に関して、「二重の分脈化」の観点から、移民が移住先に滞在するのも、あるいは本国へ帰国するのも、双方の国々の様々な状況がそのような選択肢を提供するのであること、そしてそもそも、日仏両国を始めとして多くの移民国においては、「労働者」として「移住」することを迫られた

¹ 法務省入国管理局編「第二部 出入国管理をめぐる近年の状況」(『出入国管理 平成 25 年版』所収) [<http://www.moj.go.jp/content/000117967.pdf>](2014 年 2 月 28 日参照)

シリーズ「グローバル・ジャスティス」
第41回「日本の移動とフランスの移動についてのスケッチ」
報告者：Abdelhafid Hammouche (リール第一大学教授)
(2014年2月18日)

ことが歴史の知らしめるところであるが、近年の産業構造の転換期にあつては、経済不況の元凶として「国民」から批判の矢面に立たされ、「外国人嫌悪」の風潮が生じたり、また、事実として、「労働者」としての「移民」のニーズも従来とは異なるものとなっているなど、「移民」の位置づけも変容してきている。このことをどのように捉えるか。氏は、従来のような国民国家中心の移民論では扱いきれないのではないか、と疑問を投げかけた。

最後に、本講演は主として *Revue Hommes et migrations* の特集号 “Le Japon, pays d’immigration ?” 所収の氏の論稿 ‘Esquisse d’une approche comparative des situations migratoires - au Japon et en France’²や、Hélène Le Bail 氏(フランス国立日本研究センター研究員)と森千香子氏(一橋大学准教授)との共著 ‘Le Japon, pays d’immigration’ (同号所収)に基づいたものであったため、適宜、議論を補足した報告であることを断っておく。本報告では盛り込めなかったが、詳細なデータに基づく緻密な実証がなされており、是非とも参照されたい。

(文責：和田昌也)



² Abdelhafid Hammouche « Esquisse d’une approche comparative des situations migratoires - au Japon et en France », *Revue Hommes et migrations*. Article issu du N° 1302, avril-mai-juin 2013 : 「Le Japon, pays d’immigration ?」

シリーズ「グローバル・ジャスティス」
第 41 回「日本の移動とフランスの移動についてのスケッチ」
報告者：Abdelhafid Hammouche (リール第一大学教授)
(2014 年 2 月 18 日)